



ヴロツワフ 工科大学 新学舎建設工事

鹿島ポーランド社 社長

大浦康二

Koji Oura



ガラスとセラミックの外観



全景 (躯体工事施工状況)



プロジェクトの紹介

ポーランド南西部にある人口第四の都市ヴロツワフは、ポーランドに駐在する日系企業などのビジネスマンには、外国企業による工場進出の拠点として有名ですが、一四万人の学生がいる学術都市でもあります。

本工事は、その市街地にあるヴロツワフ工科大学の新学舎の新築工事です。環境関連工学を含む土木関連の各学科を統合することで、学科間の研究交流を活性化させ、その成果を地域の発展に活用する、という目的で計画されました。

市内を流れるオドラ川の辺りに位置する新学舎は、周囲の自然環境や歴史的建造物（セラミックファサード）と調和するように、ファサードはガラスとダークグレーのセラミックが用いられると共に、内部はあくまでも建物の機能を象徴するような現代性を追及したデザインとなっています。

建物は、地上五階建て、延べ二万五、〇〇〇平方メートルで、一階のエントランスエリアからは、ガラス・ファサードを通してオドラ川の景観が眺められるとともに、棟間に設けられたアトリウムから自然光が建物内に取り込まれるようになっています。また、一階には共通エリア、上層部分には機能にあわせて三棟が配置され、共用の



完成予想図

講議室やホワイエも配置されています。

工事所見

ポーランドの冬は大変厳しくマイナス二〇度にもなり、基礎工事ができなくなる時期があります。本工事は二〇一〇年十月に着工しましたが、敷地内に見つかった多数の不発弾の処理などに苦勞しながらも、なんとか厳冬の前に基礎工事を完了させました。二〇一一年の冬までに

躯体と外装を完了して、今冬は暖かい建物の中で作業できるように工事を進捗させ、二〇一二年八月の竣工を予定しています。

発注者・設計者をはじめ、工事関係者はすべてポーランド人です。会議も資料も全てポーランド語ですので、英語は主に日本人とのコミュニケーションだけにしか使いませんが、日本のゼネコンとして期待されている安全・品質管理を徹底するため、現場での教育資料は英語とポーランド語の両方で作り、ポーランド人所長のもと全作業員に教育・指導を行っています。

トピックス

第二次大戦で壊滅的な戦禍を受けたポーランドは、その後、社会主義体制が終わる一九八九年まで、一向に開発が進まなかったのですが、資本主義導入後はその遅れを取り戻すべく、官民挙げての大規模な投資が行われており、急速に発展を続けています。

公共工事では、欧州連合（EU）からの膨大な援助資金を背景に、道路・鉄道などのインフラを中心に開発が行われています。また、民間では欧米をはじめ世界各国の企業が活発に投資をしており、建設業も各国から集まってしのぎを削っています。

ポーランドには、今までの歴史から親日的な

人が多くいます。

かつて、民主化運動中のポーランド自主労組「連帯」議長レフ・ワレサ氏が日本に招かれた際に、戦後の日本の急成長を見習い「ポーランドを第二の日本に」と発言したことになんて、本工場の契約調印式でも「ヴロツワフから第二の日本を」がスローガンとなりました。また、日本の技術への関心も高く、土木・建築を問わず、質問を受けたり紹介する機会が多くあります。

本工事が、現在、そしてこれからの日ポ交流に少しでも貢献できれば、これほど嬉しいことはありません。



音楽隊も参加した定礎セレモニー